

(NAS の HP からの翻訳ですが、末尾の文献や情報は捕捉しました。2004.7.3 門 眞一郎訳)

英国自閉症協会 The National Autistic Society (NAS)

絵シンボルの利用

はじめに

自閉症スペクトラムの3大特徴の1つに、対人コミュニケーションの難しさがあります。コミュニケーションは人と人との間で行なわれるメッセージの交換です。つまりニーズを表現したり、考えや気持ちを共有したりすることです。コミュニケーションは言語（音声言語または書字言語）を使用することがよくありますが、必ずそうだと言うわけではありません。人間は、コミュニケーションを対人場面で使い、会話を共にすることに喜びをおぼえます。しかし、自閉症スペクトラムの子どもは、対人コミュニケーションの威力や喜びを見出すことが難しいのです。養育者たちと毎日やりとりすることがあまりありませんし、言語発達が遅れることもよくあります。知的障害を伴うこともあり、そのために言語の習得が妨げられます。



しかし、自閉症スペクトラムの人は物事を視覚的に理解する傾向があるので、視覚的コミュニケーション手段を使うとコミュニケーションのプロセスを理解しやすくなりますし、コミュニケーションを取りやすくなります。そうすれば音声言語の発達や適切な対人コミュニケーションの発達も促されます。テンプル・グランディン（アメリカの動物学者で自閉症スペクトラムの人）は、画像で考え言葉は第2言語のようなものだと言っています（Grandin, 1995）。視覚的に考える人には、視覚的支援が役立つので、TEACCH プログラムでは視覚的構造化によって環境をもっと分かりやすいものにして、自閉症スペクトラムの人たちのストレスを減らし、学習を促進させます。視覚的補助手段により、自閉症スペクトラムの人は、世界と他者を理解しやすくなり、コミュニケーションのプロセスも理解しやすくなります。

コミュニケーションを補強促進するには視覚的手段

自閉症スペクトラムの人のコミュニケーションを支援するための視覚的手段には、いろいろなものがあります。話された言葉を視覚的手段で補強して、話された情報を理解しやすくなります。さらに、まだ言葉を話せない人でも、視覚的手段を使えば、欲しい物を要求することができ、自分のニーズを表明できるようになります。

物、写真、絵シンボル？

物、写真、絵シンボル、文字は、すべて言葉と一緒に使うことができますし、どれを使えばよいかは当人のニーズによって決まります。これまで、発達初期段階で使うには〈指示対象物〉が

最も適切で、その後に写真を使い、シンボルはもっと後になってからでないと思えられませんでした。

絵シンボル（線画、たいていは文字もつける）は、話された言葉を補強して視覚的に理解する人のコミュニケーションを助ける方法の1つです。しかし、自閉症スペクトラムの場合、発達の多くの面で見られるように、この面でも正常な発達の道筋、すなわち物から写真へ、そしてシンボルへという道筋をたどらないことがあります。実際、自閉症スペクトラムの人では、細密な写真よりも線画シンボルの方が混乱しにくいことがあります。自閉症スペクトラムの人は全体より部分の方を強力に知覚する（「木を見て森を見ず」という）傾向があります。そして、使われる写真（例：特定の会社のお菓子や特定の運動場の写真）が、実生活に登場する物や場所に正確に一致していないと、混乱したり苦痛を感じたりすることがあるのです。

自閉症スペクトラムの人の中には、話された言葉よりも書かれた言葉の方が理解しやすい人もいますので、絵シンボルを使うときには、必ず文字も付け加えることをお勧めします。そうすれば、自閉症スペクトラムの人にも分かりやすいだけでなく、他の人にもシンボルが分かりやすくなります。絵シンボルは一般の人には分かりやすいものですし（文字が添えてあればなおさらです）、教材会社が提供している絵シンボル基本セットに加えて、パソコン・ソフトの登場により、手に入りやすくなりました。

ラベル付け：物事や場所の名を理解すること

絵シンボルは、まず〈ラベル付け〉によって、それが表す事物と結びつけられなくてはなりません。すなわちシンボルを、それが表す事物や場所（例えば、バスケットやトイレ）にひっつけるのです。シンボルを実際の事物（や場所）に結びつけ始めたら、同じシンボルを実際の事物から少し離すことを始めます。何を取るべきか、どこに行くべきかを告げながら、シンボルを呈示します。こうやってシンボルは携行可能なものになり、それが表す事物から離れていても使うことができるようになります。新しいシンボルを導入していく割合は、人によって異なりますが、大事なことは、シンボルを使い始めるときには、自閉症スペクトラムの人に意欲がわくような事物のシンボルにすることと、新しいシンボルを導入するにあたっては、理解できていることがこちらに確認できてからにすることです。

要求の習得：欲しい物とシンボルとを交換すること

自閉症スペクトラムの人は、上手なコミュニケーションの取り方を習得することが難しい。自閉症スペクトラムの人のマインド・ブラインドネス（心が読めないこと）は、コミュニケーションの上手な取り方を理解することの難しさを増大させている。自分の要望が他の人には分からないかもしれないということが分からなければ、自分の要望を積極的に伝えようとはしないでしょう。自閉症スペクトラムの人がコミュニケーションの上手な取り方を習得できるようにするためには、望んでいるものとシンボルとの交換を教えることがとても有効です。ボンディとフロスト（Bondy and Frost）が開発した〈絵カード交換式コミュニケーション・システム〉（PECS）により、自閉症スペクトラムの子どもは要求を自発し、ニーズを伝えることを習得できます。PECSは行動理論に基づくプログラムを用いて、子どもに絵カードと子どもが好きで欲しがる物とを交換することを教えます。子どもの発達レベルに応じて、物・絵・シンボルを用います。し

かし自閉症スペクトラムの場合、多くの子どもにとって細密でない線画シンボルの方が、特に文字を合わせて用いると、理解しやすいのです。特定のポテトチップスのパッケージを切り取って作った絵カードを、別のタイプ（あるいは別会社）のポテトチップスに使うと、拒絶する自閉症スペクトラムの子どもがいます。もっと一般的なアウトラインのシンボルなら、あらゆるポテトチップスを示すものとして受け入れてくれるでしょう。

PECS では、まず子どもの好みをアセスメントして、好きな食べ物やおもちゃをいくつか見つけます。次に、注意深くスモールステップにして段階を踏んで、子どもが欲しがるこれらのアイテムと、それを表すシンボルとの交換を教えます。最初は、大人が2人必要です。2人いれば、欲しいアイテムを直接つかむのではなく、シンボルと交換することを習得させるのに、体を使って（言葉を使わず）手助けできます。1度に1つのアイテム（と1枚のシンボル）を使います。言葉で促してはいけません。子どもが最初に耳にする言葉は、そのアイテムの名称であり、それは交換の相手をした1人目の大人が言うのです。2人目の大人は子どもの背後に立ち、子どもがシンボルを交換することを体を使って促すのです。しかし決して話しかけてはいけません。ひとたび子どもがシンボルを手渡すことを習得したら、この2人目の大人は必要なくなります。

子どもが絵カード交換を習得できるよう、PECS では6つのフェイズ（段階）を注意深く構造化して（組み立てて）います。要求として積極的に人を探してシンボルを手渡す、いくつかのシンボルを区別する、携帯用コミュニケーション・ブックを使う、要求しコメントするために簡単な文を作るなどを教えます。子どもは徐々に大人の促しから自立していき、コミュニケーションは双方向性のもので、ニーズを満たすことができるものだということがわかるようになります。PECS は、かえって言葉の発達を促すということが分かっており、待ち望まれる言葉の出現に先立ってコミュニケーションの基盤を築きます。欲しいアイテムを要求するので意欲は高まりますし、視覚的に明快なスキルを教えるので、子どもはPECS によりコミュニケーションを習得します。使うのは体を使っての促しだけです。しかもこれは徐々に手控えていくことができます。そうすることで、子どもが指示待ちになることを防ぐことができます。PECS は使いやすく、高価な道具も資格試験やトレーニングもいりません。専門職のためのトレーニング・コースとビデオは用意されています。

選択すること

絵シンボルは、選択ということを教える場合にも使えます。例えば、食べ物です。いろいろな食べ物についてシンボルの理解（と交換）ができるようになったら、そのシンボルを使って選択できることを教えることができます。そして、好みの選択肢を人に伝えることを教えることができます。シンボルを貼り付けた選択肢ボードを遊びや余暇活動について使って、（受身のままでいたり、1つの活動を繰り返し続けたりするのではなく）できる活動を自閉症スペクトラムの人に、選んでもらうこともできます。



視覚的構造化

自閉症スペクトラムの人には、言葉がある人でもない人でも、予定表（や〈スケジュール〉）に絵シンボルを使って、日々のルーティン（行動の決まった流れや習慣）を示すことがプラスになります。このように絵シンボルを使うことでパニックや不安の増大を予防することができ、着替えなどの身辺自立スキルの発達を促すことができます。シンボルを使った予定表は、家庭・学校・職場・自立活動の場などに合わせて工夫することができます。このような視覚的構造化を行なうことで、自閉症スペクトラムの人は、自分の周囲の世界が理解しやすくなり、自立スキルを発達させやすくなります。絵シンボルによって、身の回りの環境を整え、予測可能なものにすることができ、穏やかな行動を促すことができます。

さらにシンボルを使うと、自閉症スペクトラムの人は活動の選択肢を理解でき、あることが〈終わった〉ということがしっかり分かり、次にどんなことがあるのかが分かります。1つの活動が選ばれ実行されたら、自閉症スペクトラムの人に（もし望むなら）終わった活動のシンボルを、一定の入れ物に入れ、次の活動に移ることを教えることができます。

〈視覚的構造化〉の使用は、TEACCH プログラムの一部であり、自閉症スペクトラムの人の生活全体にわたって、必要に応じて修正して使うことができます。

参考文献

- Bondy,A. and Frost,L. (1994): The Picture Exchange Communication System. Focus on Autistic Behaviour, Vol.9(3), pp.1-19.
- Bondy,A. and Frost,L. (2001). The Picture Exchange Communication System. Behavior Modification, 25, 725-744. (ボンディ&フロスト「絵カード交換式コミュニケーション・システム」自閉症と発達障害研究の進歩, 第8巻に所収, 星和書店)
- Grandin,T. (1995): Thinking in Pictures and other reports from my life with autism. New York: Doubleday; and Vintage Books. (テンプル・グランディン「自閉症の才能開発ー自閉症と天才をつなぐ環ー」学習研究社)

もっと知りたい方へ

PECS:

Pyramid Educational Consultants UK

<http://www.pecs.org.uk/>

Pyramid Educational Consultants USA/

<http://www.pecs.com/>

TEACCH:

TEACCH の解説パンフは英国自閉症協会情報センターやホームページから入手できる。

NAS Information Centre, or on the NAS website:

www.nas.org.uk/nas/jsp/polopoly.jsp?d=297&a=3630

絵シンボルの入手先：

A range of picture symbol resources can be obtained from: Winslow, Goyt
Side Road, Chesterfield, Derbyshire S40 2PH. Tel: 0845 921 1777. Website:
<http://www.winslow-press.co.uk/>

絵シンボル・ソフトウェアの入手先：

Widgit Software Ltd, 102 Radford Road, Leamington Spa, Warwickshire CV31
1LF. Tel: 01926 885303.
Website: www.widgit.com/

(NAS 2003年8月改訂)